



## 馬耳東風

今年は東日本大震災から10年になる。震災後何回か被災地を訪れ、その都度津波の想像を絶する巨大な力、被災の様子に圧倒された。その光景は目に焼き付いているが、それとは別に心の底に滓のように溜まっている疑問と怒りがある。石巻市立大川小学校の惨事とその後の対応である。

大川小学校跡地を見学に行ったのは2015年であった。近代的で瀟洒な校舎であったことをうかがわせる建物のあちこちが無残に破壊され、大きな渡り廊下のような建造物を支える太い鉄筋コンクリートの柱が根元から大きく傾いた様子には、津波の破壊力に恐怖を覚えた。校庭の隅には慰霊碑が建てられ、犠牲者の名前が刻まれていたが、この慰霊碑のすぐ先10mくらいのところに小山が迫っていた。この光景を目にしたとき、なぜこの小山に避難しなかったのかという強い疑問に捉われた。地震発生後児童を校庭に集めながら、50分もの間何をしていったのか？ 当日大川小学校の教員は11名で2名が休暇を取っていたという。そのうちの1人は校長ということだ。児童は78名であった。このうち児童74名、教員10名が死亡した。こんなすぐ近くに絶好の避難場所がありながら、なぜそのようなことになってしまったのかという強い疑問を持ち、その後のニュースを注視してきた。しかし、大川小学校の惨事に関して第三者委員会が設置され、民事訴訟も起こされて結審したが、最後までなぜあの裏山に避難しなかったのかという疑問は解明されなかった。先生に「山に逃げよう」と言った児童もあり、山に登ろうとして先生に連れ戻された児童もいたと

いうが、山に逃げた児童は助かっている。児童4名、教員1名が難を逃れたが、生き残った教員の証言には多くの疑問が出されている。また第三者委員会や石巻市教育委員会が実施した聞き取り調査等の資料がほとんど破棄され残されていないということである。

私は、教頭以下教員は避難先について校長の指示を仰ぎたかったのだが校長と連絡が取れず、無為に時間を過ごしてしまったのではないかと推測している。指示を仰ぎたかったというのは正確でないかもしれない。指示を仰がざるを得ないような管理体制下、すなわち自分たちでは避難場所を決められないような立場に置かれていたというべきであろうか。これは私がかつて息子の小学校のPTA会長を務めた時に教育委員会―各学校長―一般教員というヒエラルキーの強固さを痛感したことからの推察である。

いずれにしても、起きてしまったことはとりかえしがつかない。しかし、なぜ起きたのかその原因を追究し、同じ過ちを繰り返さないようにするというのが死者への礼儀であり、最も重要なことであろう。真実が解明されないままでは、津波にのまれてしまった児童たちがあまりにも可哀そうだし浮かばれまいという強い憤りにいまだに捉われている。

今回の拙文をもって老生はお暇いたします。時に小言めいた物言いにご不快の念を抱かれた方もいらっしゃるかもしれませんが、老人の戯言とご海容くだされば幸いです。これまで10年余にわたり年4回、独断と偏見に満ちた拙文をお読みいただきありがとうございます。厚く御礼申し上げます。(久)